

平成25年度
自然体験活動等長期研修

研修報告書

研究課題

体験学習（心の冒険サマースクール・AFPY）を
授業づくりに生かすー考察

下関市立向井小学校

教諭 新内俊允

（平成25年度自然体験活動等長期研修教員）

【目次】

1 研究の意図	2
(1) 研究の動機	
(2) 研究のねらい	3
(3) 研究の概要・方法	
2 実践事例の検証	
(1) AFPY の視点	
(2) 1学期の授業実践	4
ア 授業実践 特別活動	
イ 実際の授業の様子	5
ウ 授業のふりかえり	
エ 次の授業づくりのための指導実践	6
(ア) A小学校	
(イ) 「心の冒険サマースクール」小学生チャレンジプログラム	7
(3) 2学期の授業実践	8
ア 授業実践 特別活動	
イ 実際の授業の様子	9
ウ 授業のふりかえり	
エ 次の授業づくりのための指導実践	10
(ア) B小学校	
(イ) 「心の冒険サマースクール」ディスカバリー in 下関	11
(4) 3学期の授業実践	12
ア 授業実践 特別活動	
イ 実際の授業の様子	13
ウ 授業のふりかえり	
3 研究の成果と今後の課題	14
(1) 研究の成果	
(2) 今後の課題	15

【引用文献】

【参考文献】

【参照ホームページ】

体験学習（心の冒険サマースクール・AFPY）を授業づくりに生かす一考察

下関市立向井小学校 教諭 新内 俊允

1 研究の意図

(1) 研究の動機

学級担任として自分自身の授業をふりかえると、私が授業の主体となり、学習を展開してしまうことがよくあった。その要因として、私が敷いた授業のルールに児童を乗せてしまい、児童の思考に寄り添えずにいたことが考えられる。しかし、私は自分なりに理想とする授業というものを常に描いてきた。それは、「児童が主体となり、仲間とともに課題を解決していく授業」である。

そのような思いで授業実践を続けている時、3つの出来事が、私にとって大きな転機となった。

1つ目は、「山口県野外教育活動指導者研修会」への参加である。初めて出会う9名の教員とともに10日後のゴールをめざし、十種ヶ峰の山中を移動しながらキャンプをする体験である。体力と精神力の限界に挑戦する日々の中で、自己を深く見つめ直し、仲間と真に信頼し合うとはどういうことかを追究することができた。そこにはインストラクターの様々な支援が欠かせない。この10日間、受講生の学びのために、インストラクターはどのような仕かけを考え、活動を展開したのだろうか。

2つ目は、山口県教育委員会が主催する「心の冒険サマースクール」（以下、「サマースクール」）のチャレンジプログラムにスタッフとして参加したことである。山口県内の5、6年生対象のプログラム（8泊9日）において、児童8名と十種ヶ峰を舞台として山の中で移動しながらキャンプを行った。児童は日々逞しく成長していき、日が経つにつれ自分たちで課題を見つけ、解決するためにはどうすれば良いかを話し合い実行に移していった。私は、児童一人ひとりの生き生きとした姿に胸を躍らされた。インストラクターは、どのようにして、このような集団の形成をなし得たのか。

3つ目に、山口県十種ヶ峰青少年自然の家（以下、「自然の家」）で展開される「AFPY／森のチャレンジコース」への参加である。2日間ファシリテーターによる様々な活動を体験し、初めて出会った人たちとの心の距離が急速に近付いた。最後には昔からの親友だったかのように人間関係が変容する様子を感じ驚いた。ファシリテーターはどのような考えで活動を組み立てたのか。

3つの出来事を通して、児童同士や私の参加した集団の人間関係の変容を肌で感じる事ができた。そして、前述した「児童が主体となり、仲間とともに課題を解決していく授業」につながる授業づくりのエッセンスが内在しているのではないかと考えた（図1）。このことから、サマースクールやAFPY（Adventure Friendship Program in Yamaguchi）について学び、そのエッセンスに迫ることは、自身の理想とする授業づくりにつながると考えた。

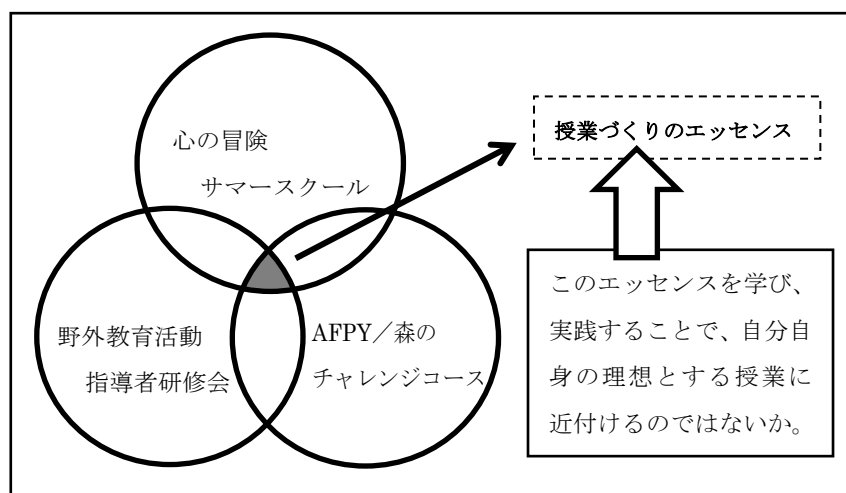


図1 研究の動機

(2) 研究のねらい

原籍校における AFPY の授業実践を通して、日常行う授業に取り入れることのできるエッセンスを明らかにする。

(3) 研究の概要・方法

本研究では、原籍校での AFPY を用いた授業実践を柱に研究を進める。その際、自己分析、児童のふりかえりプリントや他の先生方の指導助言から授業での課題を模索する。その課題解決の方途をサマースクールや AFPY の実践から見出し、次の授業実践につなげていくこととした。(図 2)

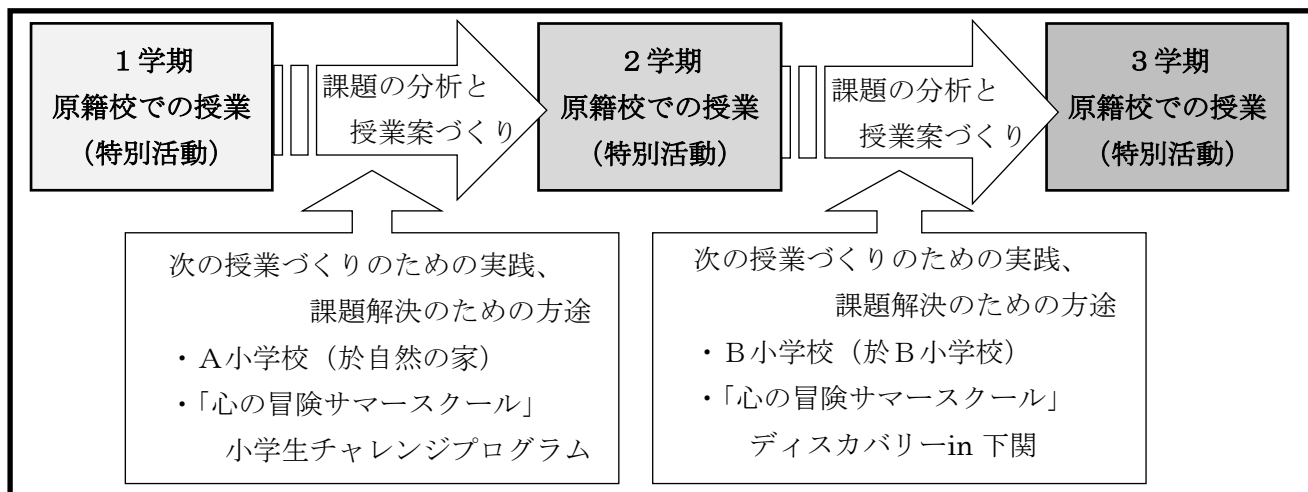


図 2 研究の流れ

2 実践事例の検証 ～サマースクール・AFPYの実践の活用を通して～

(1) AFPYの視点

AFPY に取り組む際の「基本的な考え方」(※1) に3つの視点がある。これらは、自分自身の理想とする授業「児童が主体となり、仲間とともに課題を解決していく授業」と重なるものである。そこで、これらの視点を意識して、原籍校での授業実践に取り組むことにした。(表 1)

・児童への自己選択・自己決定の場の設定

児童自身の意思によって、課題に取り組むレベルを決定させる。そのことにより課題達成時の喜びを児童のものとし、次の活動への意欲につなげる。

・最大限の相互尊重への指導

児童自身の言葉でグループのルールを決定する。そして、一人ひとりがルールを守り、仲間の言動を思いやることで、全員が心も体も安心・安全に活動できるようにする。

・学びのサイクルの創出

課題解決に向けて実践してきた内容や過程をふりかえり、次の活動や日常生活に生かす。

理想の授業	3つの出来事との関連	AFPYの3つの視点
児童が主体となり	インストラクターによる仕かけ	児童への自己選択・自己決定の場の設定
仲間とともに	インストラクターによる集団形成	最大限の相互尊重への指導
課題を解決していく	ファシリテーターによる活動の組立て	学びのサイクルの創出

表 1 理想の授業と AFPY の 3 つの視点の関連性

(2) 1学期の授業実践

ア 授業実践 特別活動（原籍校 小学4年生2クラス対象 計44名 40分）

4年生児童は2学期に音楽祭を迎える。1学期末から音楽祭の練習を学年全体で始めるにあたり、「チームワーク」について考えさせるため、以下の活動を仕組むことにした。

ねらい 一丁締めと紙コップラインを4年生全体で活動することを通して、友達の良さに気付き、4年生全体のチームワークを高める。

学習活動・内容	予想される児童の反応	指導上の留意点 (AFPYの3つの視点)
<p>1 ウォームアップの活動(図3)</p> <p>・一丁締め ①声あり②声なし (全員で合わせて1回手を叩く。)</p> <div data-bbox="169 674 587 837" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【ふりかえり】</p> <p>・みんなでそろって手を叩いた時どんな気持ちだった？</p> <p>・なぜ成功したのかな？</p> </div>	<p>・何をやるのかな。みんなで手を叩くなんて簡単だよ。</p> <p>・「せーの」という声があると、一発で成功しそうだよ。</p> <p>・どうやったら、声なしで成功できるかな。</p> <p>・みんなで大きく手をふりあげてタイミングを合わせよう。</p>	<p>【サイクル】</p> <p>・声なし一丁締めでチームワークの大切さに気付かせ、本時のめあてへとつなげていく。</p> <p>【自己】</p> <p>・声なし一丁締めでは「せーの」という調子を合わせる言葉を出さずに手を叩くためのルールを児童の意見をもとに作っていく。</p> <p>【相互】</p> <p>・仲間の言動を思いやる意識をもたせるために、声なし一丁締めで仲間の動きをよく見る活動を仕組む。</p>
<p>2 本時のめあての確認</p> <p>・めあて</p>	<div data-bbox="264 999 1002 1070" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>みんなで助け合い、4年生のチームワークを高めよう。</p> </div>	
<p>3 課題解決の活動</p> <p>・紙コップライン (紙コップを使い、ボールを目的地に運ぶ。一斉にスタートし、全チームがゴールするまでのタイムを測る。)</p> <div data-bbox="169 1391 587 1626" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【ふりかえり】</p> <p>・タイムが短くなった(長くなった)時、どんな気持ちだったかな？</p> <p>・他のグループとのかかわりはあった？</p> </div>	<p>・今日は、チームワークを高めるための活動なんだね。</p> <p>・ボールを落とさないぞ。</p> <p>・体を近づけるとうまくいく気がするよ。</p> <p>・どうやったらみんなが速くボールを運べるかな。</p> <p>・声をかけ合うといいんじゃないかな。</p> <p>・速くゴールしたから他のグループにコツを教えたいな。</p>	<p>【自己】</p> <p>・どのような意識で挑戦するのか明らかにさせるため、グループごとに目標を設定し、ボールをその象徴とする。</p> <p>【サイクル】</p> <p>・1回目の活動後、グループ目標を意識することができたか、ふりかえりの場を設定し、次の活動につなげる。</p> <p>【相互】</p> <p>・仲間と助け合う意識をもたせるために、体を近づけたり、声をかけたりしながらボールを運ぶ姿を称賛する。</p>
<p>4 ふりかえり</p> <p>・発表</p> <p>・プリント</p>	<p>・一丁締めでは息が揃って、チームワークを感じたよ。</p> <p>・グループごとの協力が音楽祭の成功につながるんだね。</p>	

○上記の指導案では、AFPYの3つの視点を以下のように表記し、指導上の留意点とする。

- ・児童への自己選択・自己決定の場の設定 ……【自己】
- ・最大限の相互尊重への指導 ……【相互】
- ・学びのサイクルの創出 ……【サイクル】

イ 実際の授業の様子

AFPYの3つの視点	児童のふりかえりプリント	他の先生方の指導助言
児童への自己選択・自己決定の場の設定	<ul style="list-style-type: none"> 紙コップラインでの5班で決めた目標は「優しい心」でした。優しくアドバイスを申し合えたので、90点は達成できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 紙コップリレーでは、各班で話し合って決めたグループ目標を意識し、ボールを運ぶ方法も積極的に話し合った。
最大限の相互尊重への指導	<ul style="list-style-type: none"> 一丁締めの際に、「息」を合わせた。紙コップラインで1回目はあまりチームワークや協力ができていなかったけど、応援を意識してやると2回目はできた。 タイムが短くなったけど、対立があったのでもっと仲良くやる方法を見つけたい。 一番最初にゴールできて嬉しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 手を叩く時、耳をすましたり、友だちと目を合わせたりする意識があった。 日頃遊ばないメンバーでかかわる様子が見られ、仲間意識を感じていた。 紙コップラインは、勝ちにこだわり、困っているグループを助ける動きがあまり見られなかった。
学びのサイクルの創出	<ul style="list-style-type: none"> 一丁締めで全員で声なしでそろった時、ものすごく達成感があった。 3班は2回目にお互いに言葉やアドバイスをかけて相手の気持ちを考えながらやっただけで、チームワークが高まりました。 2回目は歩幅の大きさを確認してやった。 	<ul style="list-style-type: none"> 一丁締めで成功した時に、全員が自然と拍手をし、喜びを分かち合えた。集団活動での楽しさに気付いたようだ。 各班で違いがあるので、他班の良さを真似したり、思いつかなかった方法をふりかえったりできると良かった。

課題①

課題②

ウ 授業のふりかえり

ほとんどの児童は「4年生全体のチームワークが高まった」と感じていたが、実際にはグループ間の競争になってしまった。協力もグループ内のものに留まってしまい、ねらいであった「4年生全体のチームワーク」へと意識を向けることができなかった。課題は次の2点に絞り込まれる。

課題① 本時の目標にふさわしくない活動設定

課題解決の活動として紙コップラインに取り組んだが、児童の意識はグループ間の競争（「タイムが短くなったけど」「一番最初にゴールできて嬉しかった」等）に向いた。

課題② 次の活動や目標につなげられなかったふりかえり

1回目の紙コップラインの後、グループ目標を意識して活動できたか、ふりかえりの場を設定した。そこでは「体をくっつけ合おう」「みんなで声をかけ合おう」などグループ内で協力しようとする意見が多く出ていたが、それを全体で共有する場を設けていなかった。そのために、グループの協力を4年生全体のチームワークにつなげるふりかえりができず、2回目もグループ間の競争へと意識が流れてしまった。



図3 合図の声がなくても・・・

このことから、本時の授業の課題を「ねらいを意識した活動の精選」と「次につなげるふりかえり」として捉え直し、次の授業実践までにその課題解決のための方途を考え出すこととした。

エ 次の授業づくりのための指導実践

(7) A小学校（第5学年 AFPY／森のチャレンジコース 16名担当 グループ目標「協力」）

エレメント	ジャイアントシーソー (ローエレメント)	TPシャッフル (ローエレメント)	クライミングタワー (ハイエレメント)
説明	大きな板の上に乗って全員でバランスをとる 	横にした1本の電柱の上に乗る、順番を入れ替わる 	10mの壁を命綱をつけてクライミングをする 
エレメントの選択理由	大きな板の上うまく乗るためには、全員で意見を出し合わなければ解決できない活動を仕組むことができる。	より積極的に近くの人とコミュニケーションをとったり、身体を支え合ったりしながら課題に取り組まなければ解決できない活動を仕組むことができる。	ローエレメントでの全員参加で協力し合い、課題を解決した経験を生かし、仲間の支えがないと個人のチャレンジが成立しない活動を仕組むことができる。
活動の様子(グループの状況)	各々が意見を主張するが、仲間の意見を聞き合うことができず、コミュニケーションが成立しなかった。挑戦も失敗が続いた。	場所を入れ替わる際に、身体を支え合い、声をかけ合いながら課題に挑戦した。	「〇〇まで登る」という個人目標を達成できるように、役割に応じて全員で声をかけ合う。ローエレメントでの経験が生かされ、個人のチャレンジを仲間が支えた。
ふりかえりの様子	失敗が続いたところで、ファシリテーターが作戦タイムをとることを提案。板に乗る順番や場所等について話し合うよう助言した。	自分たちでふりかえりを進めるように促した。成功後のふりかえりでは、「大丈夫という言葉に勇気付けられた」「自分のためにみんなが手を差し出してくれた」等の意見が聞かれ、自信を深めていった。	個人のチャレンジ後に行ったふりかえりでは、「登り方を教えてくれたおかげで目標を達成できた」「応援で勇気付けられた」等、仲間の協力を強く感じていた。最後のふりかえりでは、今回学んだことを学校でも生かそうと全員が決意を表明した。



AFPY指導実践による課題解決のための方途①

1学期の授業課題である「ねらいを意識した活動の精選」を踏まえ、活動に取り組んだ。その際に、グループの状況に応じて、どのエレメントを使用するか考えた。全員参加で課題を解決していくジャイアントシーソー、より積極的なコミュニケーションを必要とするTPシャッフル、そして仲間の支えの下に成立する個人のチャレンジであるクライミングタワーでの活動を展開していった。活動に取り組む様子やグループ状況から、グループ目標である「協力」の度合いは深まっていった。

A小学校の指導実践を通して見出した課題解決のための方途は、「目標達成への見通しが描ける活動の選択」である。児童の様子がイメージでき、ねらいに迫ることができるものであるか、しっかり吟味することが必要である。A小学校の実践では、グループの状況に合わせて、活動を精選することができた。これを2学期の授業実践につなげたい。

(イ) 「心の冒険サマースクール」 小学生チャレンジプログラム

チャレンジプログラムは、県内の小学生5、6年生を対象とした、8泊9日のOBS（アウトワード・バウンド・スクール）の手法を活用したキャンプである。私は男子8名（5年生4名、6年生4名）のグループをインストラクター（以下、イントラ）として担当した。今年度は豪雨災害の影響で、予定していた十種ヶ峰ピークアタックが行えず、7泊8日となった。

日程	活動の様子	ふりかえりの様子	ふりかえりの段階
1日目 	A君が自身の考えるテントの立て方を主張するも、その方法が認められなかった。A君は仲間を強く押し、その後黙り込んでしまった。	イントラがA君の話を1対1で聞く。その後も、全体の場ではまだ話ができないA君に代わり、イントラが説明した。他の児童には、再度その時の気持ちを伝えるよう、イントラが投げかけた。互いに思いを確認し合うことで、みんなの気持ちが落ち着いた。	イントラ中心
2日目 	地図の読み方に自信をもっていたB君が進む道を主張するも受け入れられず、争いになる。B君が地図を破り一人で先に行ってしまった。	「言いたいことを全部出して話し合ってみよう」とイントラが児童に投げかけた。その後は児童の発言をイントラがつなぎ、今後、みんなが気持ち良く過ごすための約束をリーダー(児童)中心に考えた。	イントラ中心 ↓ リーダー中心
5日目 	3・4日目で問題となっていた、目的地まで速く行くのか、楽しく行くのかで意見が対立する。B君一人が速く行きたいと主張した。	ふりかえりでは、リーダー中心に話し合いを行った。児童からは本音が出始めるとともに、B君の気持ちに寄り添う発言が徐々に出てきた。これを受けてB君も自分の思いをみんなに伝えることができるようになってきた。	リーダー中心
6日目 	ロッククライミングでは、個人の挑戦を全員で支えた。命綱を全力で引っ張ったり、進む方向を大きな声で伝えたりする姿が見られた。	ロッククライミングでの挑戦を認め合うとともに、翌日の十種ヶ峰ピークアタックに向けての話し合いを自分たちだけで進めた。そこでは食事の準備、テントの片付け等、自主的に役割を果たしていこうとする様子が見られた。	リーダー中心 ↓ 全員

サマースクール指導実践による課題解決のための方途②

1学期の授業課題である「次につながるふりかえり」を踏まえ、活動に取り組んだ。直面した課題の解決策について話し合ったり、一日の活動をふりかえったりする場を設定することで、児童は共通の認識をもって次の活動に進んでいくことができた。このような体験をしていく中で、グループはまとまり、児童は互いの気持ちを受け止めたり、自分たちでふりかえりを進めたりできるようになった。

サマースクールの指導実践を通して見出した課題解決のための方途は、「思いを共有しグループの成長を促すふりかえりの設定」である。グループがまとまるためには、思いを共有する場を設定することが必要だと認識した。これを2学期の授業実践につなげたい。

(3) 2学期の授業実践

ア 授業実践 特別活動（原籍校 小学4年生2クラス対象 計44名 80分）

4年生児童は1週間後に音楽祭を迎える。本番直前になり、再度一人ひとりが全力を出し、音楽祭を成功させるという意識を高めさせるため、以下の活動を仕組むことにした。

ねらい オールスタンドアップやビートの活動で心や体の動きを合わせることを通して、今の4年生全体のチームワークについて考え、音楽祭では最高の演奏をしたいという意識を高める。

学習内容・学習活動	予想される児童の反応	指導上の留意点（方途①②）
1 ウォームアップの活動 ・一丁締め ①声あり②声なし（全員で合わせて一回手を叩く。） 【ふりかえり】 ・音楽祭で曲の出だしを合わせるためにどんな工夫をした？ ・音楽祭でどう生かせるかな？	・1学期に同じ活動をやったぞ。 ・みんなの動きをよく見ながら手を叩いて成功させたいな。 ・音楽祭での最初に出す音を意識して合わせよう。	【見通し】 ・声なし一丁締めで心と体の動きを合わせる活動を仕組み、チームワークの大切さを想起させ、本時のめあてへとつなげていく。 【共有】 ・曲の出だしを一丁締めでイメージすることで、音楽祭本番へと意識を向ける。
2 本時のめあての確認 ・めあて <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">心と体の動きを合わせ、音楽祭を成功させよう。</div>		
3 課題解決の活動① ・オールスタンドアップ（図4）（手と足がつながっている状態で、全員が一斉に立ち上がる。） 【ふりかえり】 ・（成功した時）何でうまくできたのかな？ ・音楽祭でどう生かせるかな？	・2人組はすぐに出来そうだな。 ・声をかけ合うと立ちやすくなったよ。 ・8人で立つのは難しいな。どうしたら立てるかみんなと相談しよう。 ・4年生全員でも成功させることができたらすごいね。	【見通し】 ・達成感や楽しみ、喜びを深めるためには、工夫の確認や思いの共有がより重要になることが学べるよう徐々に難しい課題を提示する。 【共有】 ・各グループのメンバーでなぜ成功したのか、その理由をその都度ふりかえることで気持ちや思いを共有できるようにする。
4 課題解決の活動② ・ビート（リズムに合わせてメンバーで手を叩く。） 【ふりかえり】 ・音楽祭とつながることはありましたか？		
5 ふりかえり ・発表 ・プリント		

○上記の指導案では、サマースクールやAFPYの指導実践を通して見出した課題解決のための方途

①②を次のように表記し、指導上の留意点とする。

- ・方途①「目標達成への見通しが描ける活動の選択」・・・【見通し】
- ・方途②「思いを共有しグループの成長を促すふりかえりの設定」・・・【共有】

イ 実際の授業の様子

AFPYの3つの視点	児童のふりかえりプリント	他の先生方の指導助言
児童への自己選択・自己決定の場の設定	<ul style="list-style-type: none"> 一丁締めでは、自分たちで決めた目標を達成できてうれしかった。 オールスタンドアップで、自分たちで立つ方法を考えたら成功した。 	<ul style="list-style-type: none"> 一丁締めでは、「後、何回挑戦するか」と4年生全員で目標を設定し、活動に取り組んでいた。成功した時の達成感により次の活動への意欲も高まった。
最大限の相互尊重への指導 【共有】	<ul style="list-style-type: none"> オールスタンドアップで一斉に立つのが難しかったけど、音楽祭のように全員で気持ちを合わせ頑張った。 	<ul style="list-style-type: none"> 普段よりも活動の中で友だちを気づかう発言がとでも多く聞かれていた。 誰もが笑顔に溢れて活動していた。
学びのサイクルの創出 【見通し】	<ul style="list-style-type: none"> 徐々に人数が増えていき、達成できるか不安だったけど、みんなで声をかけ合ったらどんどん成功していったので、チームワークが高まった。 作戦を立てるのが楽しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> オールスタンドアップで課題が難しくなってもゴールを意識できており、意欲的に克服する姿が見られた。 最後の全員の活動で失敗が続き、集団がイライラし始めた時、何ができたか。

課題

ウ 授業のふりかえり

1学期の授業では、4年生全体のチームワークへと意識を向けられなかったが、その点を2学期の授業では改善することができた。要因として次の2点が挙げられる。

要因① 児童がチームワークを意識できる活動の選択

課題解決の活動として、全員参加でオールスタンドアップに取り組んだ。2人組→4人組→8人組・・・と人数を増やしていき、徐々に難しくなる課題を解決していく中で、全体のチームワークが高まっていくのを児童自身も感じるようになっていた。

要因② 思いを共有できるふりかえりの設定

オールスタンドアップでは、活動中、なぜ成功したのかなぜ失敗したのか、その都度そのグループでふりかえりをするよう促した。そうすることで、工夫の確認や思いの共有が即時にでき、グループとしてまとまり、次の活動に向けて気持ちを高めていくことができていた。

課題としては、児童は積極的に活動に取り組んだが、最も時間を取りたいまとめの部分で活動時間を十分確保することができなかつたことが挙げられる。課題は次のように絞り込まれる。

課題 児童の主体性を尊重した働きかけ

授業の終盤で私自身が活動を引っ張ってしまった。特に、「44人全員で成功させる」というオールスタンドアップの最後の課題で達成が難しくなった際に、成功に導きたいとの思いからヒントを出し過ぎてしまった。そこでは、児童の思いが不在となり、児童主体の場ではなくなってしまっていた。



図4 みんなでせえーの！

エ 次の授業づくりのための指導実践

(7) B小学校 特別活動（3校合同 第3・4学年 29名 90分 於B小学校の運動場）

ねらい 3校の3・4年生 29名が知り合うための活動や課題解決の活動と一緒に取り組むことを通して、他の学校の友だちのことを知ったり、仲良くなったりする。

主な活動	活動の説明	児童の様子	指導者の支援
ウルトラマン チェック (図5)	児童の心身の健康状態の程度を調べるため、腕をメーターに見立て、腕の上がり具合で状態を把握する。	体の状態を把握したところ、怪我や病気の子どもはいなかった。心の状態を把握したところ、緊張はしているものの、今日の活動を楽しみにしていた。	児童の心身の状態が良好だったことから、本時に予定している活動は適当であると判断した。
バナナおに	おにからタッチされたら両手を頭上で合わせたまま立つ（バナナになる）。仲間2人から同時に手を下ろしてもらえたら（皮をむく）また逃げるができる。	自校・他校に関わらず、バナナになってしまった児童を積極的に助けていた。初めは緊張していた児童もすぐに打ち解けることができた。	緊張をほぐし、他校の児童とも自然と助け合うことができるように、バナナおにを選択した。3校の仲間意識を高めるために、他校の児童のバナナを助けることを称賛した。
バースディ ラインナップ	誕生日順に並び替わる。今回は声を出さずに並び変わる条件を付け加えた。	互いにジェスチャーをしながら誕生日を確認し合っていた。並ぶのに5分程度時間がかかった。	ジェスチャーやアイコンタクト等を通して、他校の児童と関わられるようにした。多くのアドバイスをせずに待つことで、児童主体の活動になるようにした。
オールスタンド アップ	手と足がつながっている状態で、全員が一斉に立ち上がる。	2人組→4人組→8人組…と課題が難しくなるにつれて、成功する喜びも大きくなっていった。	成功しづらくなった時には、一つ前の課題（8人組→4人組）に戻ったり、他のチームの取組を見たりするよう話し合いの機会を促し、その後は活動の様子を見守った。

AFPY指導実践による課題解決のための方途③

2学期の授業課題である「児童の主体性を尊重した働きかけ」を踏まえ、活動に取り組んだ。その際、集団の状況に合わせた課題を提示しグループの成長を促すこと、「課題を自分たちの力で達成したい」という児童の思いを尊重した支援をすることを意識した。他校の児童ともコミュニケーションが取れるようになった上で課題解決型の活動（バースディラインナップ、オールスタンドアップ）に取り組ませた。児童主体の活動が展開されているか観察しながら必要な支援を行っていった。






図5 3校で一緒にやると・・・

B小学校の指導実践を通して見出した課題解決のための方途は、「児童の思いを尊重して待つ姿勢」である。指導者が集団の状況に合わせた支援をし、児童の気付きや反応を待つことで、児童主体の活動になると認識した。これを3学期の授業実践につなげたい。

(イ) 「心の冒険サマースクール」 ディスカバリーin 下関

ディスカバリーin 下関は、県内の小学生5、6年生を対象とした、2泊3日のOBSの手法を活用した冬山でのバックパッキングである。児童は10月に1泊2日でカヌーの体験を共有しており、2か月以上の期間が空いての再会であった。私は男女7名のグループ（5年生4名、6年生3名）のグループをインストラクター（以下、イントラ）として担当した。

日程	児童の様子	イントラの働きかけ	児童による決定
1日目 	バックパッキング初日であることから、イントラの指示を受けて山歩きの技術を身に付けた。共同装備の分け方やグループ目標などは自分たちで話し合い、歩く速さや休憩の取り方はイントラと相談しながら決めた。	山の歩き方や地図の読み方、コンパスの使い方等、山を歩くための基本的な技術を指導した。また、イントラが集団を先導し、歩く速さや休憩の取り方など、山歩きを主導した。	・グループ目標 ・役割分担 イントラと相談しながらグループで話し合っ て決定
2日目 	リーダーが中心となり、山歩きに取り組んだ。進む道や休憩のタイミングは、児童の話し合いで決めた。一人の児童が疲れて止まった時には、励ましたり、集団の前方に並ぶよう促したり、全員で問題を解決した。	イントラは集団の最後尾から児童の様子を見守った。児童の足が止まってしまった時には、並び方を工夫するよう声をかけた。	・グループ目標 ・役割分担 ・活動の展開 グループで話し合っ て決定
3日目 	自分たちの力で高畑山に登った。「きつい時こそ声をかけ合って乗り越えよう」と互いに励まし合っていた。休憩の取り方も自分たちの体力に応じて全員が納得できるようにしていた。また最後の個人ランでは、3日間をふりかえりながらそれぞれのペースで走った。	イントラは集団から少し離れた後方で児童の様子を見守った。間違った道を選択した時や児童の安全に支障をきたす際に、すぐ対応できるよう心がけた。	2日目と同様 最後の個人ランでは児童一人ひとりが明日からの抱負を決定

サマースクール指導実践による課題解決のための方途④

2学期の授業課題である「児童の主体性を尊重した働きかけ」を踏まえ、活動に取り組んだ。その際に、児童主体の学びが展開できるよう、児童の意思に基づいた選択の場を多くつくるよう意識した。主に次の3点で児童の選択を保障した。それは、①目標（グループや個人の目標）、②役割分担（共同装備の分け方やリーダー役・ナビ役等の役割）、③活動の展開（進む道や休憩の取り方など）である。児童の意見を基に決めていくことで、活動への参加意欲が高まり、生き生きと活動に取り組むことができた。イントラは、児童が話し合いや決定がうまくできるように、グループの成長段階に応じた働きかけをした。初期段階では、トレーニングとして山の歩き方や地図の読み方などの基礎的な内容を指導することで、翌日以降の話し合いや決定の判断材料となるようにした。そして、徐々に児童の意思に基づいた選択ができる場を増やしていった。

サマースクール指導実践を通して見出した課題解決のための方途は、「児童による選択の機会の保障」である。活動の方向性を決める際に児童の思いを尊重する場をつくることで、児童主体の活動となると認識した。これを3学期の授業実践につなげたい。

(4) 3学期の授業実践

ア 授業実践 特別活動（原籍校 小学4年生2クラス対象 計42名 80分）

4年生児童は4月から高学年の仲間入りをする。一人ひとりが自立したリーダーとしての自覚をこの時期にもつことができるよう、以下の活動を仕組むことにした。

ねらい バナナおにや風船パニックの活動で、これまで4年生で協力し合ってきたことを認め合うとともに、風船列車の活動でリーダーシップを体感することを通して、4月から高学年の仲間入りをするという意識を高める。

学習内容・学習活動	予想される児童の反応	指導上の留意点方途①～④
<p>1 ウォームアップの活動（全体）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなおに (全員おにでタッチされたら座る。) ・バナナおに (おにからタッチされたら両手を頭上で合わせたまま立つ。仲間2人から同時に手を下ろしてもらえたら逃げるができる。) <p>【ふりかえり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バナナになって助けられた時、どんな気持ちでしたか？ ・どんな場面で助け合った？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなおには一度つかまったらおしまいだから、つまらないな。 ・バナナおには助け合えるから楽しいな。助けられると嬉しいな。 ・運動会や音楽祭、学習発表会等でみんなと協力して頑張ってきたね。 	<p>【見通し】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2つのおにごっこを体験し比較させることで、協力することの喜びや楽しさを味わい、これまで協力しながら成長してきたことをふりかえるきっかけとする。
<p>2 課題解決の活動①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・風船パニック (仲間と協力してどのくらいの時間、人数分の風船をあげ続ける。) <p>【ふりかえり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どうすれば全体でタイムをもっと長くすることができる？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで協力して、風船を落とさないようにしよう。 ・グループで競争するんじゃないだね。 ・自分たちが考えたおすすめの方法を他のグループに紹介しよう。他のグループの方法も教えてもらいたいな。 	<p>【見通し】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タイムの合計を伸ばすことを目標とすることで、グループ間で競争せず互いに助け合うことができるようにする。 <p>【共有】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループの意見を全体で認め合う場を設定し、4年生全体で協力しようとする意識をもたせる。
<p>3 本時のめあての確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・めあて 	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">リーダーシップについて考えよう。</p>	
<p>4 課題解決の活動②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・風船列車（図6） (体と体の間に風船を挟み、目的地まで移動する。) ①グループごとに移動する。 ②全員で移動する。 <p>【ふりかえり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リーダーとはどんなことができる人のことを言うかな？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・前の人の動きや速さに合わせて、風船を落とさないように気をつけよう。 ・先頭の人リーダーだと思っていたけど、一番後ろの方が全員のことがよく見えるから声をかけやすいね。 	<p>【選択】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・列車のスタートの合図を指導者ではなく児童が決めることで、主体的な活動になるようにする。 <p>【待つ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が様々な場所を体験できるようにすることで、先頭や最後尾のリーダーを役割について考えるきっかけとする。
<p>5 ふりかえり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表 ・プリント 	<ul style="list-style-type: none"> ・委員会やなかよし班で、6年生と協力して全校のみんなを引っ張りたい。 	<p>【共有】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来年度にどのようにつなげるか意見を出し合い、思いや考えを共有する。

○前頁の指導案では、サマースクールや AFPY の指導実践を通して見出した課題解決のための方途③④を次のように表記し、指導上の留意点とする。なお、方途①②も合わせて取り組んだ。

- ・方途①「目標達成への見通しが描ける活動の選択」 ……【見通し】
- ・方途②「思いを共有しグループの成長を促すふりかえりの設定」 ……【共有】
- ・方途③「児童の思いを尊重して待つ姿勢」 ……【待つ】
- ・方途④「児童による選択の機会の保障」 ……【選択】

イ 実際の授業の様子

AFPY の 3つの視点	児童のふりかえりプリント	他の先生方の指導助言
児童への自己選択・自己決定の場の設定 【待つ】 【選択】	<ul style="list-style-type: none"> ・風船パニックで、目標タイムを決めてグループで活動するのが楽しかった。 ・風船列車のスタートの合図をグループで考えた。みんなで考えた方法がうまくいくと、とてもうれしかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・風船パニックでは、どうすればタイムが伸びるのか、考える時間があった。 ・風船列車でスタートのタイミングを決める時、準備ができていたかをメンバーで確認し合う意識があった。
最大限の相互尊重への指導 【共有】	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなおによりバナナおにの方が助け合うことができるので楽しかった。 ・風船列車では風船を落とさないように声を出してタイミングを合わせた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・風船パニックでは、落ちる風船をカバーする拾い役や状況を伝えるアナウンス役等を決めて協力していた。 ・グループ間で競争せず全員で行えた。
学びのサイクルの創出 【見通し】	<ul style="list-style-type: none"> ・風船列車でグループで成功したことを生かして4年生全員でも挑戦した。 ・5年生では委員会や仲良し班でリーダーとしてみんなをまとめていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動に込められたメッセージを段階を踏んで体験できるとより理解できたのではないかと思う。 ・活動が終わった後に、5年生のことを意識して感想を書くことができた。

ウ 授業のふりかえり

2学期の授業では、指導者が指示を出し過ぎてしまい、児童主体の活動にできなかったが、その点を3学期の授業では改善することができた。要因として次の2点があげられる。

要因① 児童の主体性を保障するための待つ姿勢

風船列車では、児童が様々な場所を体験できるように、「風船が落ちたら先頭が交代する」というルールを設定した。そうすることで、先頭だけがリーダーの役割を果たすのではなく、中間や最後尾だからこそ果たせる役割（前の人との間隔に気を付ける、全体の方向や速さに気を配る等）にも、気付くことができた児童がいた。

要因② 選択の機会を設定することで引き出す児童の主体性

風船列車では、スタートの号令を各グループに委ねた。スタートのタイミングを委ねることで、各グループともスタートで声をかけるのか合図を出すのか等、どうするか自主的に決めていた。



図6 風船列車は続くよどこまでも

3 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

本研究では、AFPY の3つの視点（児童への自己選択・自己決定の場の設定、最大限の相互尊重への指導、学びのサイクルの創出）を大切にして、原籍校での特別活動の授業実践や自然の家を中心としたサマースクール・AFPY の実践に取り組んできた。そして、これらを通して AFPY の指導をよりよいものにしていくための4つの方途を見出した。

- ・方途①「目標達成への見通しが描ける活動の選択」 ……【見通し】
- ・方途②「思いを共有しグループの成長を促すふりかえりの設定」 ……【共有】
- ・方途③「児童の思いを尊重して待つ姿勢」 ……【待つ】
- ・方途④「児童による選択の機会の保障」 ……【選択】

これらの方途がヒントとなり、自分自身が理想とする授業づくりのエッセンスを以下の4つの価値（図7）として捉えていく。

ア 授業導入時において見通しがもてることの価値

児童自身が授業の見通しをもつことができれば、授業内容が明確となり、積極的に参加が可能となる。見通しとは、課題達成へのイメージである。児童が見通しをもつためには、教師は、適切な課題を設定しなければならない。そして、導入時において課題を提示する際には、「あれ？おかしいな」「すごい！自分もやってみたい」等、児童の知的好奇心を揺さぶるような工夫をすることが重要であると認識した。

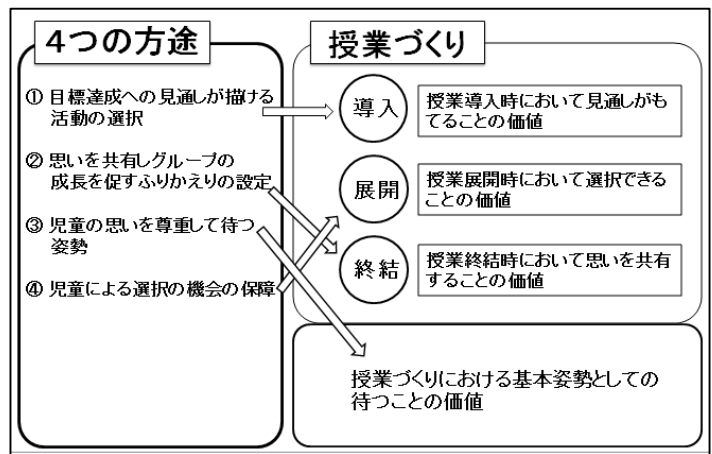


図7 研究の成果

イ 授業展開時において選択ができることの価値

課題に対するアプローチのレベルや方法を選択することができれば、児童はその課題を自分自身のものであると捉え、達成したいという強い意思をもつことができる。そうすることで、児童は学びの実感もちながら学習し、課題を達成した際には喜びを強く感じる。そして、次の学習のために、その過程をふりかえり、より良い方法を考えていくことが分かった。児童の選択を尊重するためには、教師は多様な選択肢を把握しておき、児童の選択に合わせた支援ができるよう準備しておかなければならない。

ウ 授業終結時において思いを共有することの価値

学級全体で、課題達成への思いを共有することができれば、学習内容の定着を図るだけでなく、学級の連帯感を深めることにもつながる。このとき、教師は児童の意識が次の学習や日常生活につながるよう意識しなければならない。思いの共有をより効果的なものとするためには、学級の取組をふりかえることを繰り返し、習慣化していくことが重要であると認識した。

エ 授業づくりにおける基本姿勢としての待つことの価値

上記の3点を実践していくためには、教師の「待つ」姿勢が必要となってくる。「待つ」とは無責任に学習の流れを児童に任せるというものではない。先に述べたようにしっかりと見通しを持ち、児童一人ひとりや学級が変容する教育的瞬間を的確に捉えるための積極的な「待ち」である。

(2) 今後の課題

今後の学校現場において、次の2点を課題として意識し、日々の教育実践に励んでいきたい。

ア 授業づくりのエッセンスを各教科の授業に拡充

本研究における原籍校での授業実践では、特別活動の授業を行ってきたが、実際の教育課程では教科学習が多くの時数を占めている。また、AFPYの基本的な考え方に「他者とかかわるあらゆる活動の中で」という表現がある。このことから特別活動の授業に特化することなく、各教科の授業でも本研究で意識し続けたAFPYの3つの視点や授業づくりのエッセンスを活用していきたい。

イ 授業づくりのエッセンスの探求

本年度、サマースクールやAFPYに取り組んでこられた実践者の授業を見学させていただく機会を得た。その実践者に共通することは、サマースクールやAFPYの手法はいうまでもなく、教育原理や教育心理など、多岐に渡る分野の手法を適切に組み込まれて授業をされていることが分かった。今回の研修で得たものを基盤として、さまざまな分野に学びの枠を広げ、さらなる授業づくりのエッセンスの探求をこれからも続けていきたい。

【お礼】

今年度、素晴らしい研修の機会を与えてくださった山口県教育委員会、本研究に際してご協力いただいた各団体、山口県十種ヶ峰青少年自然の家の職員の皆様をはじめ、ご指導いただいた全ての方々に感謝いたします。ありがとうございました。

【引用文献】

※1)「AFPYの手引き」、山口県教育庁社会教育・文化財課、2012

【参考文献】

- ・藤村寿、『AFPY入門～「やまぐちふれあいプログラム」の理論と実践～』、宮崎製版、2005
- ・津村俊充・石田裕久編、『ファシリテータートレーニング第2版』、ナカニシヤ出版、2010
- ・プロジェクトアドベンチャージャパン、『グループの力を生かす』、みくに出版、2005
- ・プロジェクトアドベンチャージャパン、『クラスのちからを生かす』、みくに出版、2013
- ・諸澄敏之、『みんなのPA系ゲーム243』、杏林書院、2005
- ・杉田洋、『よりよい人間関係を築く特別活動』、図書文化、2013
- ・鹿毛雅治、『子どもの姿に学ぶ教師「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」』、教育出版、2007
- ・藤井千春、『子どもが蘇る問題解決学習の授業原理』、明治図書、2012

【参照ホームページ】

- ・山口県十種ヶ峰青少年自然の家
<http://www.c-able.ne.jp/~seed-10/>